

平成21年度研究チーム活動中間報告（第2回目）

「東アジアにおける戦争と絵画」

No.110 研究幹事 金 泰虎（国際言語文化センター）

前近代における東アジア地域で起きた戦争や、その戦の副産物とも言える戦争画を題材に、5人の研究者がそれぞれのテーマのもと個々の研究を進めた。その進捗の状況に関して、以下のようにまとめた。

金泰虎は、初年度の研究に続き、「文永・弘安の役」・「文禄・慶長の役」を題材にした絵画を中心に考察してきた。特に日韓やアメリカにまで亘って散在している絵画資料の原本に関しては、なるべく肉眼で観察し、写真撮影を行った。これらの絵画が成立した時期、つまり同時代ものなのか、それとも後の時代なのかによって、歴史学はもとより美術学史の分類やその意味合いにおいても、従来とは異なる位置づけができることの手がかりを得た。なお、この戦争画を通じて、戦争そのものが当時の政治や社会、ひいては人々の戦争に対する意識にどのような影響を及ぼしたのかに注目していくことにした。

佐藤泰弘は、「蒙古襲来絵詞」を蒙古襲来という事件の解釈・受容という観点から検討を進めた。従来から、神国思想の発揚における蒙古襲来のインパクトが指摘されてきたが、「蒙古襲来絵詞」における神国思想の影響について検討すること、また神国思想を中世成り立ちからの神祇思想の展開のうえに位置付けることが必要である。また蒙古襲来は、表象的なレベルにとどまらず、現実の政治・社会に影響を与えたが、鎌倉幕府の対応にとどまらず、対外関係や博多の都市計画が変化したことについて検討する必要がある。

大村拓生は、南北朝内乱期の丹波研究に関する文献を収集するとともに、そこに引用されている史料を各種史料集・自治体史など刊本から収集した。また刊行されていないものについては写真帳にあたって翻刻する作業も進めた。その作業を進める中で全国的内乱状況に規定されながらも、相対的に独自の行動を展開する荻野氏の存在が、先行研究の中で十分に位置づけられていないことが明らかになった。近年の内乱史研究においても、内乱が長期化した要因として地域に内在する矛盾から再構成する動向があり、独自行動を行った荻野氏の追求はそうした動向を進展させる事例として興味深いものになることが期待される。そこで荻野氏に関わる史料を網羅的に収集し、その勢力基盤を明らかにする作業に取りかかっている。そのなかで京都の動向とストレートにつながる保津川流域と、山の隔てた奥丹波というべき地域の性格の相違が、問題を解く鍵になるという見通しが得られた。

趙ギュヒは、朝鮮王朝誕生以来、比較的平和であった朝鮮社会に文禄・慶長の役が起こったことで、朝鮮士大夫（貴族層）の文化生活、つまり文人画にどのような形で甦ってくるのか分析を行った。この時の戦争に対する意識が後の時代にも受け継がれ、文人画の一つの素材になった点は重視すべきであると考えた。ことに、朝鮮士大夫の悠々自適な生活の象徴とも言える文人画に、戦争に関する意識が無意識的に内含され、緊張感さえ与えるその印象は、美術史における素材究明の観点からも重要である。

李須恵は、文禄・慶長の役が終結した後、朝鮮から来日した友好使節団の「朝鮮通信使」に同行した図画署画員（絵描き師）が描いた絵画に、戦争に関する記憶がいかに残っているのかを検討した。とりわけ、金明国という絵描き師が残した絵画に加えて、さらに当時

の知識人や民衆との交流の中で表れた戦争に対する認識や記憶についても考察を行う必要性があると気づいた。

以上、初年度や今年度の研究中間報告に基づいて、今年度中、報告書として仕上げていくことにする。